氏　名　（本　籍）	長 尾 宗 典
学　位　の　種　類	博　士（ 文 学 ）
学　位　記　番　号	博　乙　第　2730　　号
学 位 授 与 年 月 日	平成　27　年　3　月　25　日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第２項該当
審　査　研　究　科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	高山樗牛・姉崎嘲風の「美学」思想と「文明批評」 ―明治期日本の〈憧憬〉をめぐる精神史―

主　　査	筑波大学 教授	博士（文学）	中野目　徹
副　　査	筑波大学 教授	博士（文学）	千 本 秀 樹
副　　査	筑波大学 教授	博士（文学）	伊 藤 純 郎
副　　査	筑波大学 准教授	博士（学術）	平 石 典 子

論　文　の　要　旨

本論文は、明治中期に活動を開始した美学者高山樗牛（1871～1902）と宗教学者姉崎嘲風（1873～1949）の思想を解明しようとするもので、序章、終章を含めて７章２５節からなる作品である。全体の視点は、彼らの思想を文学・美術・宗教などをめぐる専門的な学知に依拠する批評活動を通じて文化の次元で「国民」の内実を探求しようとする文化ナショナリズムの一つの類型として捉え、それを〈憧憬〉という独特の思惟様式と時代状況に対して行なった主張の対応関係として描き出すことで、課題に応えていこうとするものである。

序章「研究の視角」では、まず、高山と姉崎によって〈憧憬〉という概念が発見された経緯について紹介されたあと、先行研究の批判と本論文の課題設定がなされる。従来の研究では、ナショナリズムやロマン主義の思想家として理解されてきた二人だが、時代状況のなかで抱いた課題が何であり、それに対していかなる論理で対応しようとしたのかという点に踏み込んで考察を加えられることがなかった。そこで著者は、一次史料の悉皆的調査によって、彼らの美学や宗教学の理論水準を明らかにするとともに、彼らの思想活動を支えた雑誌メディアの存在形態を把握することで、二人の「美学」思想とそれに基づく「文明批評」を解明することを本論文の課題として設定する。

第１章「明治期における「美術」の語り方と「美学」の誕生」では、最初に、彼らの思想形成の前提として、明治前期における「美学」受容のあり方を検討している。当時「美学」は「美術」を説明する学として位置づけられ、「美術」の振興は日本の文明化を推進するものと理解されていたという。つまり、「美術国」というナショナル・アイデンティティの形成とも深く関わっていたのである。ついで、明治２０年代の雑誌創刊ブームのなかで、地方在住青年を中心に雑誌の寄贈交換が始まり、「書生社会」は「誌友交際」という時代特有の「読書社会」の誕生を促すことになったとされるが、この「誌友交際」

という言論空間こそが高山や姉崎の思想活動を下支えする基盤であった。

第２章「高山樗牛・姉崎嘲風におけるドイツ哲学の受容」では、高山と姉崎の高等中学校時代・帝国大学文科大学時代について、新出史料を用いながら、両者の思想形成期を考察している。将来の国家エリートとして養成された彼らは、高等中学校時代に強い自負心を抱くと同時に、厳しい競争のなかでしだいに精神的な価値への関心を強めていき、校友会雑誌の編集にも積極的に参加していくという共通の経験を有していた。彼らは、大学入学後、井上哲次郎やケーベルからドイツ哲学の思想を学ぶが、これは後年、彼らが編み出すことになる「理想」に向かって漸進的に「現実」を向上させていくという〈憧憬〉という思考態度の原型となるものであった。高山は在学中に『帝国文学』や『太陽』への執筆を開始するが、彼の精力的な言論活動を支えたのは、「見えざる日本の兵士」という自意識であったと述べられている。

第３章「日清戦後における〈憧憬〉の萌芽」では、大学を卒業し博文館の社員として雑誌『太陽』に筆を執った高山の言論活動と、大学院で研究を続けた姉崎の言論活動とを対比しながら論じている。明治３０年（1897）、井上哲次郎らが結成した大日本協会のスタッフに招き入れられた高山は、「美学」を批評活動の基礎に据え、雑誌『太陽』誌上などで「日本主義」の旗幟を鮮明にした。一方、姉崎は、日本主義者が歴史的考察を無視した宗教排斥論を唱えている点を批判し、丁酉倫理会を結成して独自の道徳論を構想するとともに、自らの宗教学の体系化を進めていった。高山が「日本主義」とともに提唱した「国民文学」については、読者層の量的な拡大が高山の議論に一定のリアリティを与えていたが、高山自身は「国民文学」の具体的な方向性を示すことができず、坪内逍遥らとの歴史画論争を経て、道徳によって芸術作品を規制する立場から、しだいに美の自立性を容認する立場へと転回していったと論じている。

第４章「世紀転換期における〈憧憬〉の精神」では、明治３３年（1900）の留学内定から、病気による洋行の挫折、言論人として再出発を図っていく時期の高山の内面の軌跡が明らかにされる。この時期に起こった北清事変は、国内に文明化の弊害を認識させ、とくに地方文芸雑誌に寄稿する若い文学青年の間に文明批判の精神を育んでいったが、高山は、自らのライフワークとしての日本美術史研究を進め、文明についての考察を深めるなかで、文明の弊害を乗り越える価値としての「美術」の意義を発見していく。高山が、道徳の相対的価値を喝破し、絶対的価値である美を提唱したのが同３４年の論文「美的生活を論ず」であった。以後、高山は無窮の価値としての美への〈憧憬〉を前面に押し出した「文明批評」を展開していくことになったことが指摘されている。

第５章「日露戦争期における〈憧憬〉のゆくえ」では、晩年の高山が追求した精神世界と、それを引き継いだ姉崎の思索について、日露戦争を挟んだ明治末期までの時期を考察している。無窮の美への〈憧憬〉を深めていく高山は、理想のための国家批判も辞さない偉大な人格としての日蓮の事績に惹かれていった。一方、明治３６年、留学から帰朝した姉崎は、文明化の進展と資本主義経済の発展のなかで、人生問題に悩む知的エリート層すなわち「煩悶青年」を擁護し、横井時雄と雑誌『時代思潮』を創刊して言論活動を行なっていた。しかし、日露戦争の進展と社会の変貌のなかで、姉崎はしだいに個人主義の風潮に違和感を持ち、放縦な自由よりも、「小我」を棄てて「大我」に合一する自己犠牲の価値を説く国家主義的な立場に傾斜していく。姉崎は学者として理想主義を掲げた批評を展開していくが、当時台頭しつつあった自然主義に代わる有効な思想運動は展開しえなかったと論じる。自然主義の動向を危機的に受け止め始めた政府が、美術奨励・文芸保護の名目で取り締まりに乗り出したとき、国家発展の基礎として芸術を説く姉崎は、最終的に政府の文芸委員に就任することに象徴されるように、むしろ政

府寄りの立場に接近していったと結論される。

終章「本論文の成果」では、はじめに、石川啄木による高山・姉崎批判が紹介され、明治末期における思想転換のなかで姉崎の議論が占めた位置を確認するとともに、本論文全体の成果と今後の課題が整理されている。それによれば、〈憧憬〉の発見に始まる高山と姉崎による批評活動は、文化価値の重要性を一貫して主張することで日清・日露戦争期の言論界において独自の境位を示した点で近代日本の思想史上高く評価できるものであるが、政治との距離という点では当該期の姉崎の発言と行動のなかに妥協的な一面を見いだしている。

審　査　の　要　旨

本論文は、明治中期を代表する思想家である高山樗牛の思想を軸に、帝国大学で同期だった友人の姉崎嘲風を併走させることで、高山死後の明治末年までを視野に収める優れた思想史叙述になっている。なかでも、彼らによって発見された〈憧憬〉という思惟様式あるいは思考態度は、「理想」を追求しながら「現実」を批判する「文明批評」という領域の成立をもたらし、美学や宗教学という彼らが依拠する学知に基づく批評の対象が文化全体に及ぶものであった点を指摘したことは高く評価できる。また、新たな史料によって彼らが受容したケーベル哲学の内容を把握し、さらに、彼らの言論活動を支持する基盤として「誌友交際」という時代特有の「読書社会」の存在を実証的に解明した点も、今後の研究動向に寄与するところが大きいと考えられる。日露戦後における姉崎の思想評価に関しては、大正期以降の文化哲学といかに接続するかという点から見て、なお課題を残していると言わざるをえないものの、それも上記のような本論文の有する意義を損なうものではなく、意欲的な思想史研究の成果として学界に貢献するところが多いと判断される。

平成２７年１月２１日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行なった。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第１０条（３）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。